

# 2023 年リハビリテーション医学セミナー感想文

## 【ねりま健育会病院】

### 医学部 6 年生

#### 実習全体を通して学んだこと

- ・リハビリテーション科医の仕事は、患者とその家族を幸せにすること。
- ・チーム医療のなかで医師の役割は、チームの働きやすい環境を作ることと目標を設定すること。
- ・病態の把握、予後の予測、計画の策定の段階を踏み、最後に目標を達成する。
- ・高齢者は多くの疾患を抱えているため、なんでも診ることができるリハビリテーション科医になるべきである。
- ・患者が回復するためには、良い運動、良い環境、良いコミュニケーションが必要。
- ・スタッフの目が死んでいると患者に悪影響があるため、医師はチェックする必要がある。

#### 各実習で学んだこと

##### 外来見学

- ・回復期に入れるためには、何らかの疾患名を付ける必要がある。
- ・家族が代理で来ているときは、本人の希望を聞き出す必要がある。
- ・家族の理解度も多様である。

##### 入院受け見学

- ・紹介状を読んで持つ印象と実際に会った印象は異なることがある。
- ・患者と家族の関係性を察することができる。
- ・最初の ADL 評価のときに、リハビリテーションにどれくらい協力的かがわかる。

##### リハビリテーション見学

- ・失語がある患者のリハビリテーションでは、クローズドクエスチョンやジェスチャーを活用する。
- ・移動時間や道具の準備時間、患者の休憩時間がタイムロスになっている。
- ・患者にとってリハビリテーションは楽しい面も辛い面もある。

##### リハビリテーション部長講義

- ・リハビリテーションは人が人の手で人を治すという点が重要である。
- ・机を木目のものにしたたりトイレを部屋の外に設置したりしているのは、病院の立ち上げの頃から患者の尊厳を重要視しているから。
- ・病院の立ち上げは大変だがやりがいがある。

## 医学部 6 年生

リハビリテーション科を志望科としている私にとって、この 2 週間の実習は非常に有意義で多くの学びがありました。ねりま健育会病院は回復気のリハビリテーション病院であり、普段急性期の大学病院で学んでいる私には刺激的で、新たな物事の見方を手に入れることができたように思います。

今回の実習で最も大きな学びは、リハビリテーション医療では「チーム医療」に重点が置かれており、医師は中でもリーダーシップを取っていく必要がある職種であるということを再認識することができたことでした。もちろん、チーム医療はどの診療科でも重要なものであり、その重要性について理解しているつもりではありましたが、しかし、医師を始め看護師や薬剤師、栄養士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、MSW など非常に多くの職種が治療に関与するリハビリテーション科では、私の想像していた以上にチームとしての働きが中核を成しており、とりわけこのねりま健育会病院では院長である酒向先生の意向もあり、円滑なチーム医療が行われていました。

患者さんの検査結果や今後の方針を話し合うカンファレンスは、大学病院であれば通常医師のみで行われ、他の職種が参加しないことがほとんどで、カンファで決まった内容を医師が他の職種に指示として出すといった形で行われているように思います。もちろん、人員の数等の問題で、急性期の病院では仕方のないことなのかもしれません。しかし、それでは療法士など他の職種が、医師の思考の過程までを明瞭に理解することができないのではないのでしょうか。

そんな中ねりま健育会病院では、一人の患者さんに対して医師、Ns、PT、OT、ST、MSW がそれぞれ一人ずつチームを組み、定期的にカンファレンスを行っていました。

カンファでは、患者さんの治療の進捗について各職種から報告され、それをもとに皆で議論を行い、目標や理解をすり合わせていくということが行われていました。このように、チームでのカンファを重ねることで、チーム全体の理解が深まり最適な治療・リハビリテーション計画を立てることができると感じました。また、医師以外の職種の方は医師に対して発言することに臆してしまうことが往々にしてありますが、ねりま健育会病院ではそのようなことは一切なく、医師が議論をまとめつつ各役職の発言を促すことで活気のある議論が生まれていました。ねりま健育会病院院長である酒向先生が著書の中で話している、「チームをオーケストラに例えると、医師は指揮者の役割を担っています」といったことが実現されているというわけです。

また、患者ファーストの医療を行うことの重要性も再認識することができました。医師が必要な治療だと考えても、それが患者さんにとってベストな選択肢となるとは限りません。リハビリテーションは、「元の自分」に戻るのではなく「新しい自分」になる補助をすることだというお話を今回の実習中何度も耳にしました。その言葉通り、患者さんの意見を蔑ろに身体の治癒を目的として治療を進めるのではなく、可能な限り患者さんの願い・目標を叶えられるように治療を進めていくことが大切です。

また、患者ファースト医療の例として、ねりま健育会病院では患者さんが明るくリハビリテーションに取り組むことができるような環境が整えられています。院内は非常に明るく、日光を十分に取り込むことができる作りになっており、清掃が行き届いていました。実習している私も明るい気分になるような病院をつくるには、綿密な準備があったのだろうと考えさせられました。食事については、栄養面はもちろんのこと食事を楽しむことで患者さんの意欲が出るようにとの酒向先生の意向が組み込まれており、実際に多くの患者さんは食事を楽しんでいました。このように、治療やリハビリテーションだけに重きを置くのではなく、環境を整えることが患者さんのモチベーションを上げ、結果的にそれが治療やリハビリテーションの成果向上に繋がることを、身をもって感じるすることができました。

最後に、今回学生実習を受け入れてくださった酒向先生を始め、2 週間の中でリハビリテーションに関して様々なことを教えていただいたねりま健育会病院の皆さんに、心より感謝申し上げます。今回の経験を活かし、リハビリテーション医療の発展に少しでも寄与できたらと思います。